

34. タヌキメバル 狸目張(しろそい)



◇撮影後のコメント◇

キツネメバルとタヌキメバルの美味しさ勝負は、引き分けである。これから何度も我口中にて戦うことになるが、同時に評価することは、まあないだろうし、する気にもならないし、する意味も見つからない。仮に同時に味わう機会があっても、評価の前にどっちがどっちかすら分らない。舌の感覚はその程度である。もし、判別できたとしても美味しさとは別。

タヌキ「やりやがったな。こっちも攻撃だ！ガブリ！」

キツネ「痛っ！しまった。中身まで化けきれなかったか？アイツの方が美味しいのか？化けたオレは、いったい誰なのか？えーい。もう一回カジッてやる。ガブリ！」

タヌキ「痛っ！しまった。中身まで化けきれなかったか？アイツの方が美味しいのか？化けたオレは、いったい誰なのか？えーい。もう一回カジッてやる。ガブリ！」

そうやって、くんずほぐれずのカジリ合いを繰り返しているうちに、キツネもタヌキもとうとう、涙に打ち上げられてしまったそう。そこへ漁師が通りかかり「美味そうだな」と両方持って帰って食べたそう。どちらも美味であった。めでたし、めでたし。

これが、中国の故事由来の「漁夫の利」における本邦初の適用事例であることは言うまでもない。言うまでもないのである。であるから他言無用。ここだけの話にして欲しい。